（2）関連文化財群

出雲市における関連文化財群は、「文化財相互をつなぐテーマが見いだせること」、「一定のエリアを超えた広がり、分布があること」、「関連文化財群を構成する文化財の状況や価値が把握されていること」、「長く保存・伝承されてきていること」を基準として、文化財の歴史的・地理的な内容や特色を踏まえ、テーマ、関連性の視点、主な構成要素を整理して 11 テーマを設定します。

関連文化財群の保存・活用にかかる課題及び方針について、テーマごとに抽出、設定し、第５章の文化財の保存・活用に関する措置に掲げる取組を進めていきます。

表６　関連文化財群

番号	テーマ	基となる歴史文化の特徴
①	今に息づく出雲神話と風土記の世界 ～連綿と歴史文化を引き継ぐ出雲～	■出雲神話と風土記の舞台として連綿と受け継がれた歴史文化
②	神々と仏が坐（いま）す祈りの場 ～出雲特有の「神仏隔離に基づく習合」と神仏分離～	■原始・古代の出雲と歴史を物語る歴史文化 ■古墳群などの地域的広がりや寺社の歴史的関連などにより、つながり合う歴史文化
③	出雲平野の形成と原始世界の発展 ～国引き神話と符合する平野の形成と遺跡群～	■原始・古代の出雲と歴史を物語る歴史文化 ■出雲平野と日本海沿岸・島根半島、中国山地、湖沼・河川といった地理的条件を反映した多様な歴史文化
④	古墳時代の出雲の勢力とくらし ～社会構造と精神世界～	■原始・古代の出雲と歴史を物語る歴史文化 ■古墳群などの地域的広がりや寺社の歴史的関連などにより、つながり合う歴史文化
⑤	出雲大社と出雲の建築文化 ～大社造・神社建築の美と精神性～	■原始・古代の出雲と歴史を物語る歴史文化 ■古墳群などの地域的広がりや寺社の歴史的関連などにより、つながり合う歴史文化
⑥	治水・開拓の歴史と屋敷構え ～水と生き、農地を開拓した先人たち～	■出雲平野と日本海沿岸・島根半島、中国山地、湖沼・河川といった地理的条件を反映した多様な歴史文化
⑦	たたらや鉱山とともに生きた足跡 ～鉄や銅などをつくり運び出してきた歴史文化～	■出雲平野と日本海沿岸・島根半島、中国山地、湖沼・河川といった地理的条件を反映した多様な歴史文化
⑧	うみとかわの恵み　～水辺の生業～	■出雲平野と日本海沿岸・島根半島、中国山地、湖沼・河川といった地理的条件を反映した多様な歴史文化
⑨	地域に息づく民俗芸能や習俗 ～神々のふるさとのくらしの文化～	■出雲神話と風土記の舞台として連綿と受け継がれた歴史文化
⑩	出雲の文芸と学問 ～出雲大社の社家や旧家、私塾跡などからたどる文化～	■原始・古代の出雲と歴史を物語る歴史文化
⑪	海・川・陸のみちと町場の形成 ～多様な交通手段を生かした交流・交易とくらし～	■出雲平野と日本海沿岸・島根半島、中国山地、湖沼・河川といった地理的条件を反映した多様な歴史文化 ■古墳群などの地域的広がりや寺社の歴史的関連などにより、つながり合う歴史文化

①今に息づく出雲神話と風土記の世界　～連綿と歴史文化を引き継ぐ出雲～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲神話は『古事記』や『日本書紀』、『出雲国風土記』に記されている出雲にちなんだ神話の総称で、八岐大蛇（やまたのおろち）神話、国譲り神話、国引き神話などがあり、出雲市の市域も中心的な舞台となっています。

『古事記』（712 年）や『日本書紀』（720 年）には、スサノオの八岐大蛇退治など、出雲を舞台とした神話が記されています。

また『出雲国風土記』（733 年）には、『古事記』や『日本書紀』には記されていない地名やその由来（神門郡（かんどぐん）ほか）、特産品（紫菜（のり）ほか）、伝承（佐香郷（さかのさと）ほか）などの地方の情報も詳細に記され、その中には国引き神話をはじめとする地域色豊かな神話が盛り込まれています。

「今に息づく出雲神話と風土記の世界」は、今も身近に存在する記紀・風土記の伝承地、登場地、記載事項などに由来する関連文化財群であり、連綿と引き継がれた神話や風土記に記された場所を、今でも見て、知って、学び・楽しむことができます。

【保存・活用の課題】

・記紀、風土記に関する資料及び登場地などの把握
・関連文化財群の周知
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・記紀、風土記関連資料等の調査・研究
・関連文化財群の情報発信、博物館展示
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★出雲大社
★日御碕神社
★須佐神社
★土椋烽（とくらのとぶひ）
☆長浜神社
☆韓竈（からかま）神社
☆朝山六神山（ろくしんざん）　など

■無形

★大土地神楽
★県指定の無形民俗文化財：見々久（みみく）神楽など
★市指定の無形民俗文化財：乙立（おったち）神楽など
☆その他無形民俗文化財
☆伝承されてきた神話：八岐大蛇神話、国引き神話　など

■その他

☆地名・地域：薗の長浜（稲佐の浜）、杵築、日御碕　など

図 14　「今に息づく出雲神話と風土記の世界」における主な構成要素

②神々と仏が坐す祈りの場～出雲特有の「神仏隔離に基づく習合」と神仏分離～

【関連文化財群のストーリーと特色】

旧暦 10 月の神在月に全国から八百万の神々が集まり、神議りが行われる出雲大社は、「国中第一之霊神」と平安時代の文書に記されています。この出雲大社の北東側、北山山系に位置する鰐淵寺は、古来、浮浪滝を中心とした修業の場であり、中世には数多くの堂塔や僧坊が建ち並び、「国中第一之伽藍」と呼ばれていました。出雲大社と鰐淵寺は、それぞれ神社・寺院として組織的・空間的・機能的に明確に区別されながらも、両者が相互補完的に一体となって機能する「神仏隔離に基づく習合」により密接に関係し、ともに隆盛を極めました。しかし、寛文６年（1666）には約 400 年余りに及ぶこの関係に終止符が打たれ、他地域に先駆けて神仏分離が実現することとなります。

出雲大社と鰐淵寺はともに国引き神話で最初に引き寄せられた北山山系に位置していますが、この北山山系にある鰐淵や日御碕は、平安時代末期の『梁塵秘抄』に「聖の住所」、つまり仏教者の修業の地として記されています。そして、中央の仏師により作られた９世紀頃の仏像群が納められている萬福寺（大寺薬師）も、北山山系の南東山麓に位置しています。さらに北山山系には、かつて出雲大社や鰐淵寺を訪れる際に利用された参詣道が残るほか、鰐淵寺の山号「浮浪山」にちなんだ「不老山」を号する寺院も、法統を守り継いでいます。

このように北山山系には、出雲市における信仰の歴史を語るうえで欠くことのできない寺社などが集中しています。

「神々と仏が坐す祈りの場」は、出雲大社と鰐淵寺、そして日御碕神社や大寺薬師の仏像により信仰の歴史を紐解く関連文化財群であり、国宝や重要文化財、史跡をはじめとした数多くの文化財、さらにはこれらの寺社の立地するエリアの歴史文化をネットワーク化させるものです。

【保存・活用の課題】

・神社仏閣等の保存修理
・関連文化財群の周知
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・神社仏閣等の修理及び排水設備等の環境整備
・関連文化財群の情報発信、博物館展示
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★出雲大社
★日御碕神社
★鰐淵寺境内（史跡）
★鰐淵寺の神像仏像（銅造観音菩薩立像など）
★萬福寺（大寺薬師）の仏像
★関連文書（千家家・北島家・鰐淵寺文書など）
☆鰐淵寺境内の四至・峠・一丁地蔵　　など

■その他

☆出雲大社領（12 郷）
☆鰐淵寺領（国富荘、漆治荘）　　など

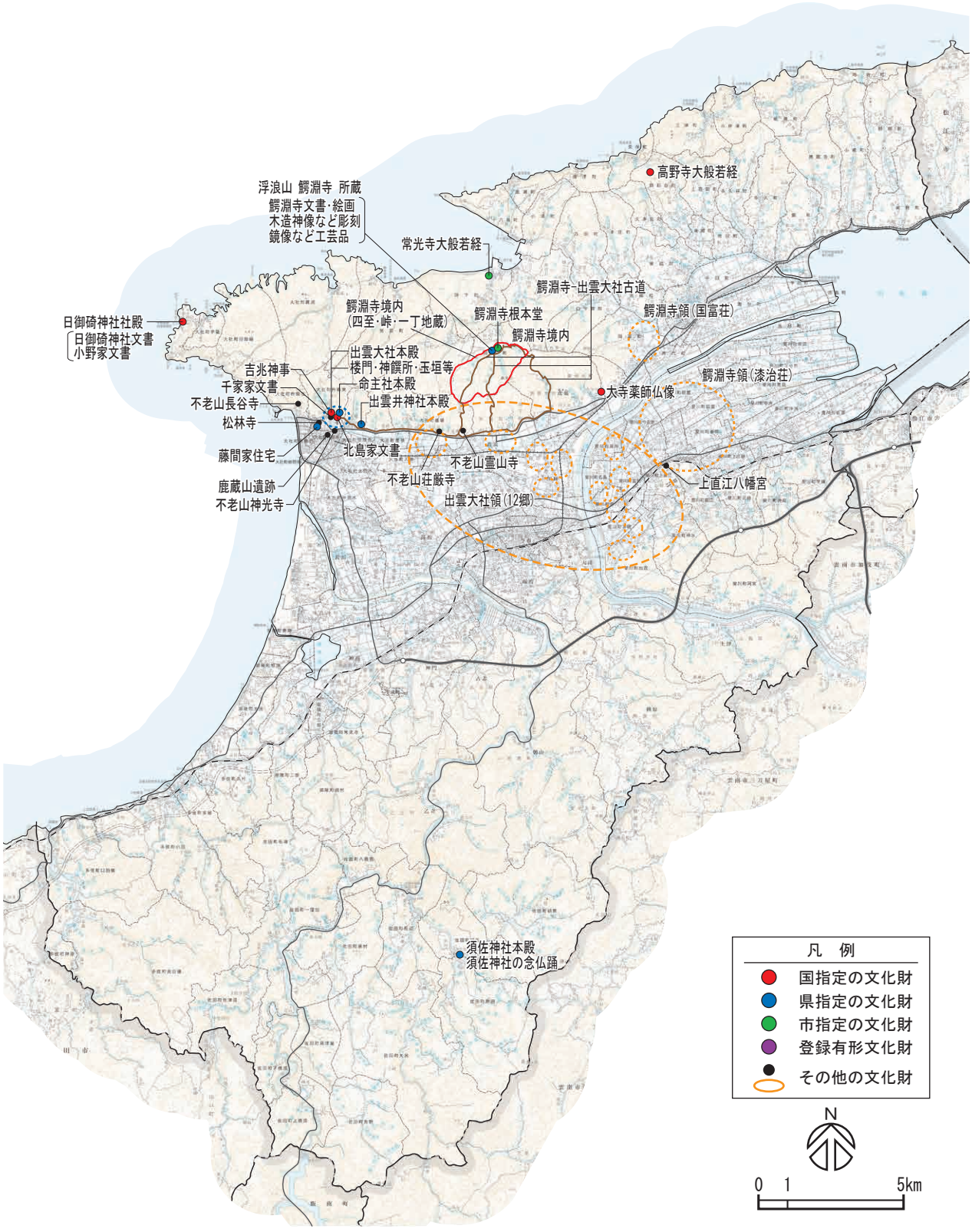

図 15　「神々と仏が坐す祈りの場」における主な構成要素

③出雲平野の形成と原始世界の発展　～国引き神話と符合する平野の形成と遺跡群～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲平野は、約 4000 年前の縄文時代後期、三瓶山の噴火による多量の土砂を供給源として形成が進みました。約 2000 年前の弥生時代には、斐伊川と神戸川の三角州が島根半島まで達し、現在の出雲平野の原形ができあがりました。

こうした出雲平野の形成と合わせた原始における人々の営み・足跡は、一帯に残されている多くの遺跡によってうかがい知ることができます。これらを概観すると、縄文時代はまだ形成途中であったため人々が生活できる場所も限られていた出雲平野に、人が進出し多くの集落が出現するのは弥生時代に入ってからだということが分かります。縄文時代には狩猟採集を主とした食糧調達が、弥生時代に入ってから稲作を中心に行われるようになり、広大な土地と水源に恵まれた出雲平野は集落運営に格好の舞台となりました。

この広大な出雲平野の生産力を背景に大きな勢力をもつ集団も出現したようです。その証としては大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡が挙げられます。ここで見つかった 358 本の銅剣は、発見当時に日本中で出土していた銅剣の総数を上回っており、弥生時代中期のこの地に大きな勢力があったことが裏付けられました。そして弥生時代後期には、西谷墳墓群に大型の四隅突出型墳丘墓が次々と築かれます。これらは墓の規模や豪華な副葬品からまさに王墓と呼べるものです。この時期に「出雲王」が出現し、出雲平野のムラを次第にクニとしてまとめていったと考えられます。

出土品に着目すると、当時の他地域交流が見えてきます。荒神谷遺跡から見つかった銅鐸６個と銅矛 16 本は、それぞれ近畿と九州を中心とした分布域を示し、出雲は東西文化の結節点にあることが分かります。また、西谷墳墓群の２号墓や３号墓では、大陸からもたらされたガラス製品や水銀朱のほか、吉備から運び込まれたり、北陸の特徴が認められたりするお祭りの土器が大量に出土しています。これらの例から、弥生時代は他地域との交流が活発に行われたことが分かります。

「出雲平野の形成と原始世界の発展」は、出雲平野の形成に伴って人々の生活の場が増加・変遷、発展していく様子を示す関連文化財群であり、縄文時代以降は少なかった集落が弥生時代中期に増加し、後期にはクニへとまとまり栄光の時代を迎え、他地域とも活発に交流していた姿をうかがい知ることができます。

【保存・活用の課題】

・遺跡や出土品の特性把握・評価
・発掘調査や研究成果の周知
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・弥生時代の遺跡を中心とした調査・研究と博物館展示
・関連文化財群の情報発信
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★荒神谷遺跡と出土品
★西谷墳墓群と出土品
★猪目洞窟遺跡と出土品
★出雲大社境内遺跡（出土品）
★真名井（まない）遺跡（出土品）　　など

■その他

☆荒神谷博物館、出雲弥生の森博物館
☆斐伊川、神戸川
☆神西湖（神門水海（かんどのみずうみ））　　など

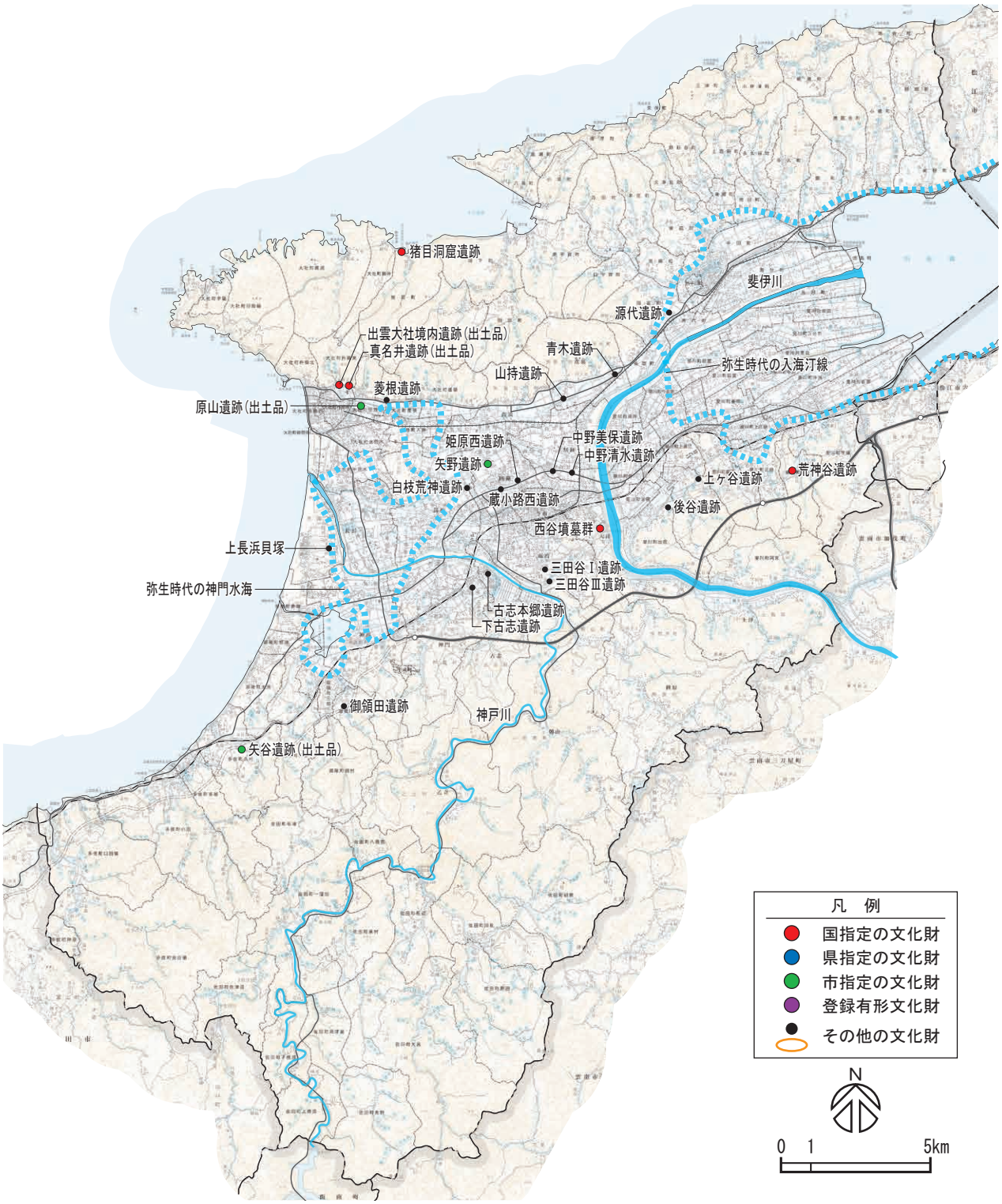

図 16　「出雲平野の形成と原始世界の発展」における主な構成要素

④古墳時代の出雲の勢力とくらし　～社会構造と精神世界～

【関連文化財群のストーリーと特色】

古墳時代に入ると、初頭には古志本郷遺跡や下古志遺跡などから大集落の解体・縮小がうかがえます。中期には中野美保遺跡や浅柄（あさがら）遺跡などで集落の出現が認められ、後期になると三田谷Ⅰ遺跡、九景川（くけがわ）遺跡などが加わり集落数が増加し始めます。

こうした集落の増減と呼応するように、前期と中期には数少なかった古墳が、後期には一気に増加するとともに、大規模首長墓も登場します。

出雲西部を掌握していた歴代の首長墓と考えられているのが今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳・上塩冶地蔵山古墳です。今市大念寺古墳は県内最大の前方後円墳で、石室には日本最大の家形石棺があります。上塩冶築山古墳は、その周りを小規模な円墳群と横穴墓群に取り巻かれており、当時の社会構造を如実に示しています。また、近年の国富中村古墳の調査では、埋葬から時間が経過した後、石棺の蓋を人為的に壊すなど、死者の復活を阻止する儀礼（再生阻止儀礼）が確認され、当時の人々の精神世界や死生観が明らかになってきました。

これらの古墳のなかには石室内が自由に見学できるものがあるほか、現地に説明板やパンフレットが設置されており、古墳時代の世界や特色を現地で体感することができます。

「古墳時代の出雲の勢力とくらし」は、当時の社会構造や人々の精神世界などをうかがい知ることができる古墳をはじめとした関連文化財群であり、出雲平野とそれを見下ろす中国山地及び北山山系の丘陵地・山麓部に位置する古墳を中心に、古墳と周辺・背景の景観を体感しながら、古墳時代に思いをはせることができます。

【保存・活用の課題】

・遺跡や出土品の特性把握・評価
・発掘調査や研究成果の周知
・国史跡の保存・活用に関する方針や計画的な取組
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・古墳時代の遺跡を中心とした調査・研究と博物館展示
・関連文化財群の情報発信
・国史跡の保存活用計画の策定
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★今市大念寺古墳
★築山古墳群（上塩冶築山古墳など）
★国富中村古墳
★西谷墳墓群
★北光寺（ほっこうじ）古墳
★神庭岩船山古墳
★矢野遺跡（矢野貝塚）
☆中野美保遺跡
☆上石堂平（かみいしどうびら）古墳　　など

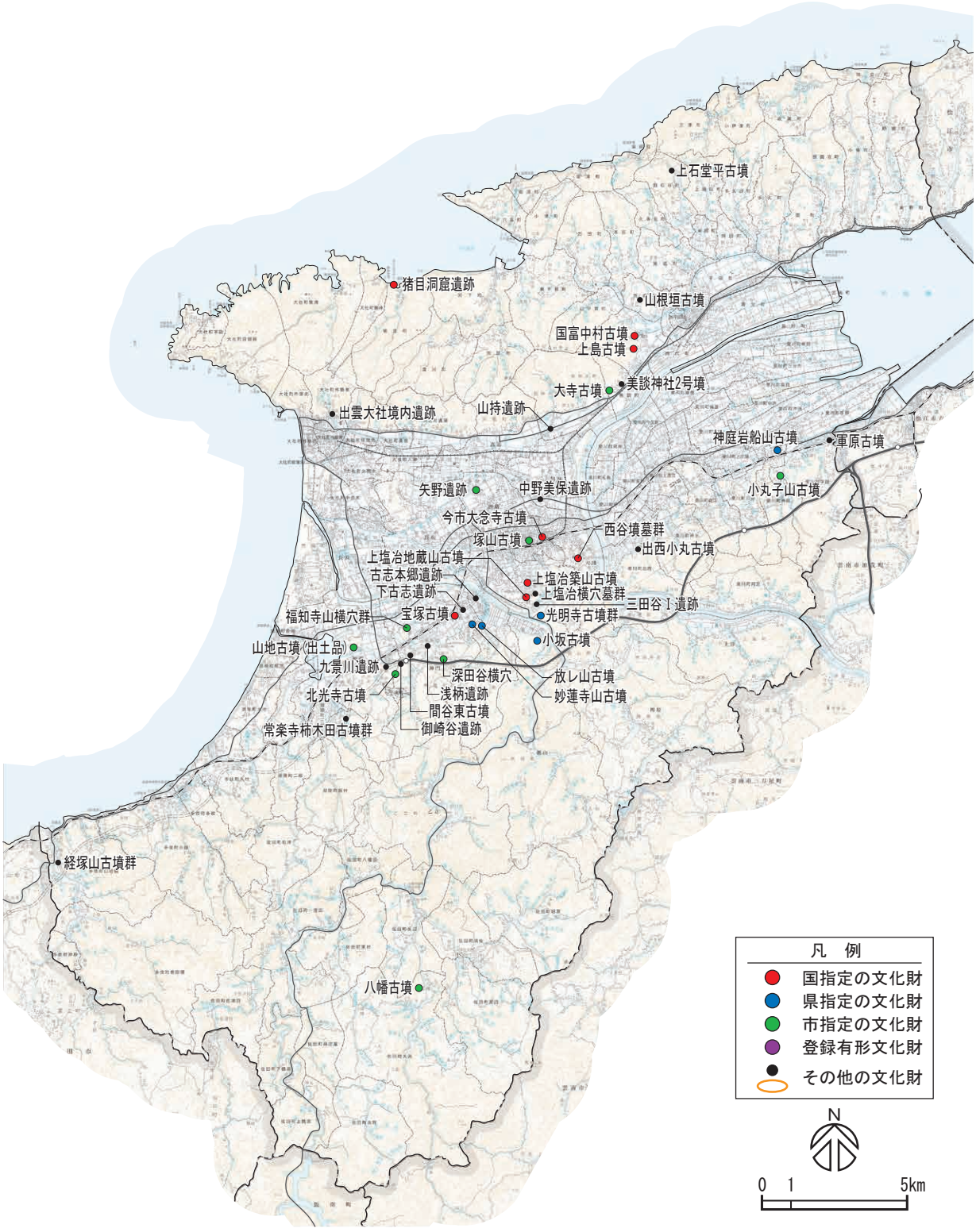

図 17 「古墳時代の出雲の勢力とくらし」における主な構成要素

⑤出雲大社と出雲の建築文化　～大社造・神社建築の美と精神性～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲市には、国宝の出雲大社本殿、重要文化財の出雲大社楼門・神饌所・玉垣等、日御碕神社社殿、県指定の文化財である須佐神社本殿、出雲大社境外社をはじめ多数の神社建築があります。

これらの多くは建築様式からみると、出雲大社本殿に代表される大社造やその変形です。広義の大社造とは切妻造妻入で、主屋に木階の屋根（階隠等）が付くものを指します。平成 27 ～ 28 年度に行った市内の神社建造物悉皆調査では、大社造及びその変形が８割近くを占めていることが分かりました。

主な大社造としては、阿須伎神社（遙堪）、佐香神社（東）、大宮神社（鵜鷺）、宇賀神社（国富）などがあり、中山間地を含め市内全域に立地しています。これらは、平面形から８形式に分類でき、地域的な違いや時代的な変遷が浮かび上がってきました。

また、全国で最も多い流造は出雲では少なく、重要文化財の出雲大社末社十九社本殿の他、朝山八幡宮（高松）、塩冶神社（塩冶）、高濱八幡宮（高浜）などがあります。通常の流造では横に長い長方形が多いですが、出雲には方形平面の本殿が複数あり、大社造の影響が考えられます。その他春日造などの形式にも大社造の影響が勘案でき、この地域における大社造の意味を考えるうえできわめて示唆的な事象といえます。

一方、これらの神社の多くでは神事が行われるとともに、神楽の由来・舞台となる神社も少なくありません。

「出雲大社と出雲の建築文化」は出雲地域を特徴づける大社造を中心に、建築を通じて神社をつなぐ関連文化財群であり、出雲の神社建築とその美をつくり、継承し、生かしてきた精神性などを見て、知って、学ぶことができます。

【保存・活用の課題】

・神社建造物の建築様式や意匠等の保存継承
・出雲地方特有の神社建築様式などの周知
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・神社建造物の建築様式や意匠等を継承した保存修理
・関連文化財群の情報発信
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★出雲大社
★日御碕神社
★須佐神社
★出雲大社境内遺跡出土品
★命主社本殿

☆長浜神社
☆韓竈神社
☆伊奈西波岐神社
☆佐香神社
☆玖潭神社
☆立虫神社・万九千神社
☆青木遺跡　　など

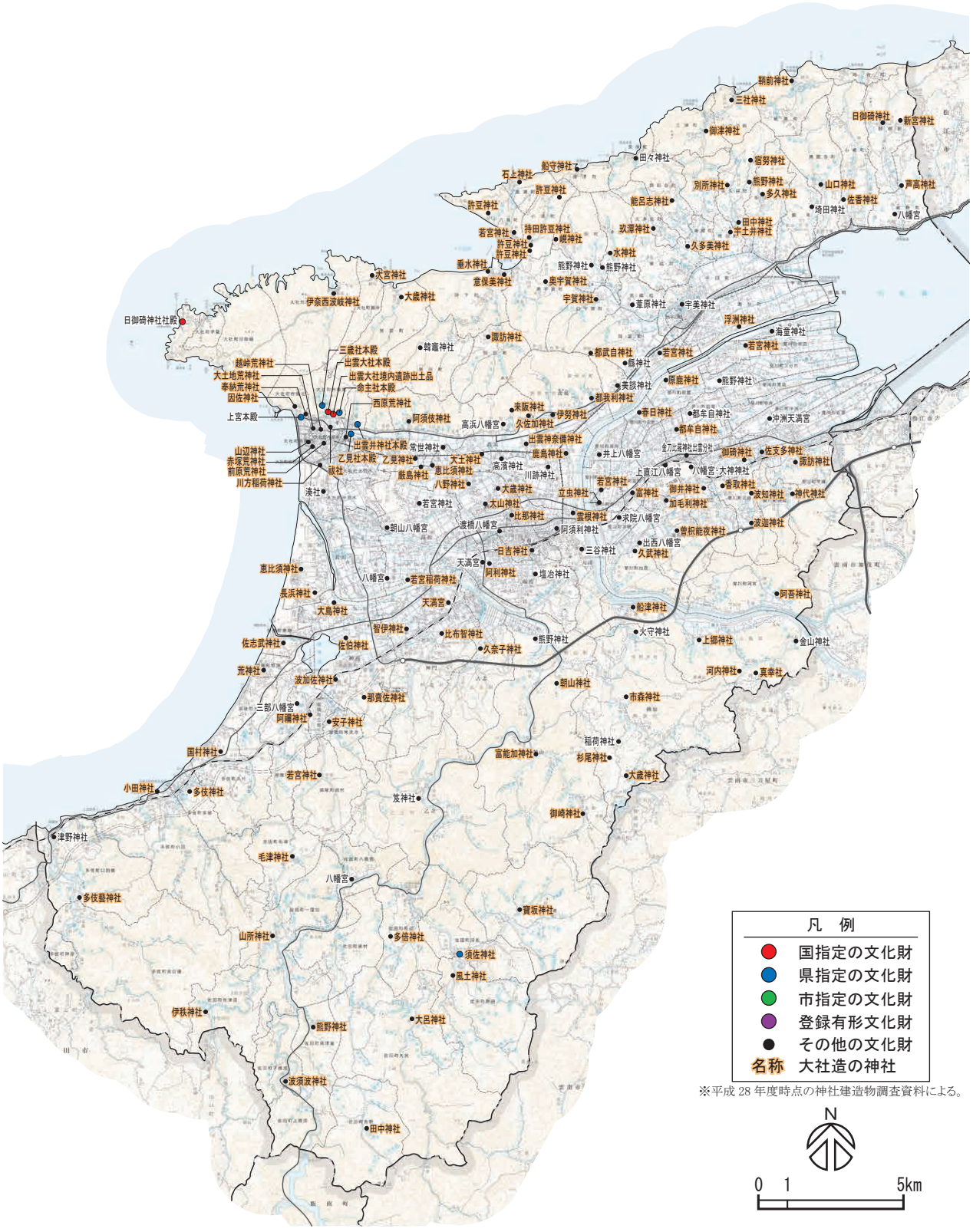

図 18　「出雲大社と出雲の建築文化」における主な構成要素

⑥治水・開拓の歴史と屋敷構え　～水と生き、農地を開拓した先人たち～

【関連文化財群のストーリーと特色】

斐伊川はかつて、神戸川とともに神門水海を経て日本海に注いでいましたが、中世末から近世初頭にその流れを完全に東に変えました。その後、寛永期に松江藩によって若狭（わかさ）土手が築かれると斐伊川東流は恒久的なものになり、現在のように宍道湖・大橋川・中海を経て日本海に注ぐようになりました。

これと前後して、斐伊川上流域の奥出雲では砂鉄を用いた「たたら製鉄」が隆盛を迎えます。その砂鉄採取は「鉄穴（かんな）流し」という多量の土砂を下流域に流す方法で行われました。このため、流下した土砂により下流域では平野が拡張する一方で、斐伊川は天井川となり度々水害が起こりました。

しかし、先人たちは氾濫した土砂を利用して堤防を築き、人工的に川を付け替え（川違（かわたが）え）、高瀬川などを開削し、斐伊川が注ぐようになった宍道湖において新田開発を進めました。また、18 世紀以降には木綿栽培が農民の貴重な副収入源として本格的に行われるようになります。平田地域では 18 世紀後半に木綿の生産が盛行し、木綿市も開かれ町が栄えました。そして 19 世紀に入ると、松江藩の他国売り木綿の４割を平田の木綿が占めるようになります。

これら物産は、斐伊川や神戸川、高瀬川、平田船川などの舟運、さらには宍道湖や日本海、街道を通じて、交易されることになりました。

加えて、新田開発に伴って築地松を備えた散居集落が形づくられました。特に、築地松は、屋敷の周囲の土居（築地）を固めると同時に、北西の強い季節風から屋敷を守る役割を担い、出雲地方独特の景観を今に伝えています。

また、米の増収を図るため、高畝栽培による米作りが行われました。この耕作は幕末に「カナリ法」として考案されて以降、明治期に出雲平野一帯で普及する特徴的な農法であり、使用されていた農具は斐川文化会館に保存展示され、県指定有形民俗文化財として今に伝えられています。

「治水・開拓の歴史と屋敷構え」は、近世以降の斐伊川改修とそれに伴う新田開発や集落の形成、高瀬川、平田船川などの水運に係る関連文化財群であり、災害に立ち向かいながらも、水と共に生きた歴史文化や生業、独特の散居集落を体感できます。

【保存・活用の課題】

・出雲地方特有の散居集落を形成する出雲屋敷※1、築地松の保存継承
・散居集落の希少性や農地を開拓した先人達の足跡等の周知
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・出雲屋敷や築地松などの保存継承への支援
・関連文化財群の情報発信
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★原鹿（はらしか）の旧豪農屋敷、出雲屋敷

★高畝栽培の農具（斐川文化会館）

☆築地松、茅葺き民家　　など

■無形

☆先人（大梶七兵衛）の偉業の伝承　　など

■その他

☆斐伊川

☆斐川・神西湖周辺の開拓　　など

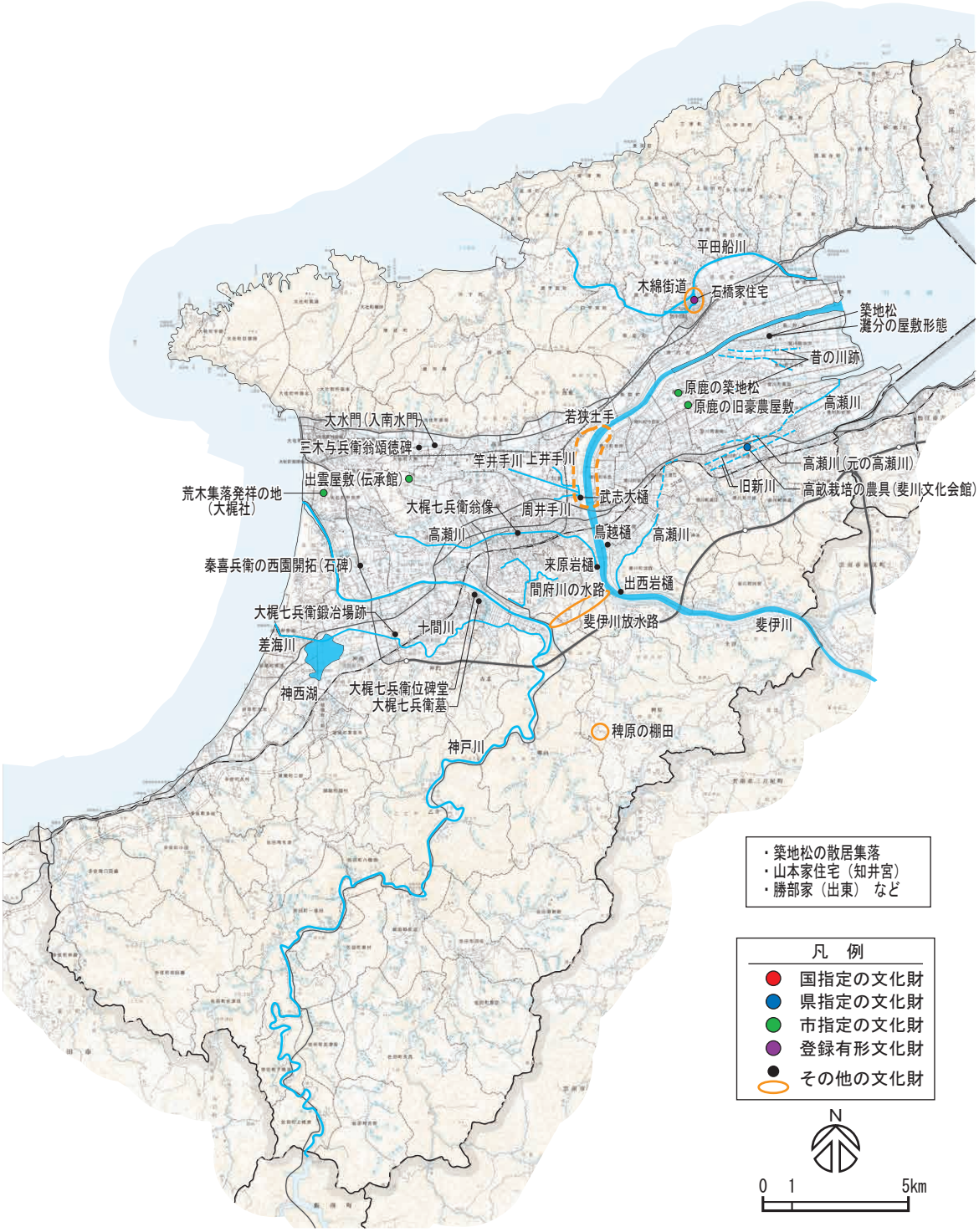

図 19　「治水・開拓の歴史と屋敷構え」における主な構成要素

※1　**出雲屋敷**　　出雲地方伝統の地主屋敷の構えを踏襲しており、主屋を中心に長屋門・中門・主屋東側の納屋・裏手の蔵・屋敷林などの建物等を配置する形式で、上層の農家の屋敷構えをよく表している。

⑦たたらや鉱山とともに生きた足跡　～鉄や銅などをつくり運び出してきた歴史文化～

【関連文化財群のストーリーと特色】

田儀櫻井家によるたたら製鉄は江戸時代初期から約 250 年にわたり続き、盛衰はありましたが出雲西部地域の一大産業として、出雲市多伎町にとどまらず出雲市佐田町や大田市など隣接する一帯のたたら場を経営しました。そして、松江藩の庇護のもとに、神門郡の地場産業として発展するとともに、生産した鉄（割鉄、銑）が、口田儀から北国、大坂（現在の大阪）、九州北部などに積み出され、各地で鍋や釜、農具等に加工され、地域の経済や生活を支えました。

田儀櫻井家の中心施設が集中する宮本鍛冶山内遺跡や、主要なたたらである越堂たたら跡・聖谷たたら跡・朝日たたら跡は、「田儀櫻井家たたら製鉄遺跡」として国史跡に指定されています。

田儀櫻井家の本家である櫻井家（現・奥出雲町上阿井）、絲原家（現・奥出雲町大谷）、田部家（現・雲南市吉田町）は、奥出雲の三大鉄師として知られています。このうち田部家のたたら製鉄の経営は、雲南市に近接した佐田町の須佐地区（旧飯石郡域）にも及んでおり、現在でも田代たたら跡、郷城たたら跡を確認することができます。また、堂ノ原たたら跡は、田儀櫻井家と田部家によって共同経営されたたたらとして知られています。

出雲においては、たたら製鉄だけでなく採鉱も盛んに行われました。島根半島（北山山系）の鰐淵から唐川・鵜峠にかけての地域一帯は、地下資源の宝庫で、鰐淵鉱山跡、鵜峠鉱山跡、鷺銅山跡があります。特に、鷺銅山は江戸時代の『銀山旧記』によると石見銀山発見のきっかけになったとされています。これら鉱山で採鉱された銅などは、近隣の鷺浦や鵜峠、河下から積み出されたようです。また、この一帯の鉱山では、石膏の採掘も行われ、昭和 30 年代半ばには国内最大の産出量を誇る石膏鉱床群とされていましたが、輸入原料に押され、昭和 40 年代から 50 年代に相次いで閉山となりました。こうした鉱山・採掘の歴史を伝えるため、鵜鷺コミュニティセンターでは鵜峠鉱山で使用されていた鉱山用具、坑道図面、鉱物標本などが保存・展示されています。さらに、最近の調査では、多伎地区において終戦間際に操業を始めた砂鉄鉱山である久村鉱山跡の詳細が明らかになりました。

「たたらや鉱山とともに生きた足跡」は、近世から近代のはじめにかけて行われた鉄や銅などの生産、運搬などにちなんだ関連文化財群であり、これらの歴史的、文化的な遺産を通じて、近世のたたら製鉄の一貫した工程とそこでのくらし、島根半島（北山山系）における鉱山の足跡、そして流通・交易などの歴史文化を窺い知ることができます。

【保存・活用の課題】

・田儀櫻井家を中心とした「たたら」や文献資料の把握
・田儀櫻井家のたたら製鉄経営の様相や発掘調査成果の周知
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・田儀櫻井家たたら製鉄遺跡を中心とした調査・研究
・情報発信拠点となるガイダンス施設の整備
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★田儀櫻井家たたら製鉄遺跡（宮本鍛冶山内遺跡、越堂たたら跡ほか）

★郷城柱の木（郷城たたら跡）

☆その他の製鉄関連の遺跡（屋敷谷（やしきだに）たたら跡、掛樋（かけひ）たたら跡、草井谷鍛冶屋（くさいだに）跡など）

☆島根半島の鉱山跡（鷺銅山跡、鵜峠鉱山跡、鰐淵鉱山跡）

☆口田儀の港・町並み　　など

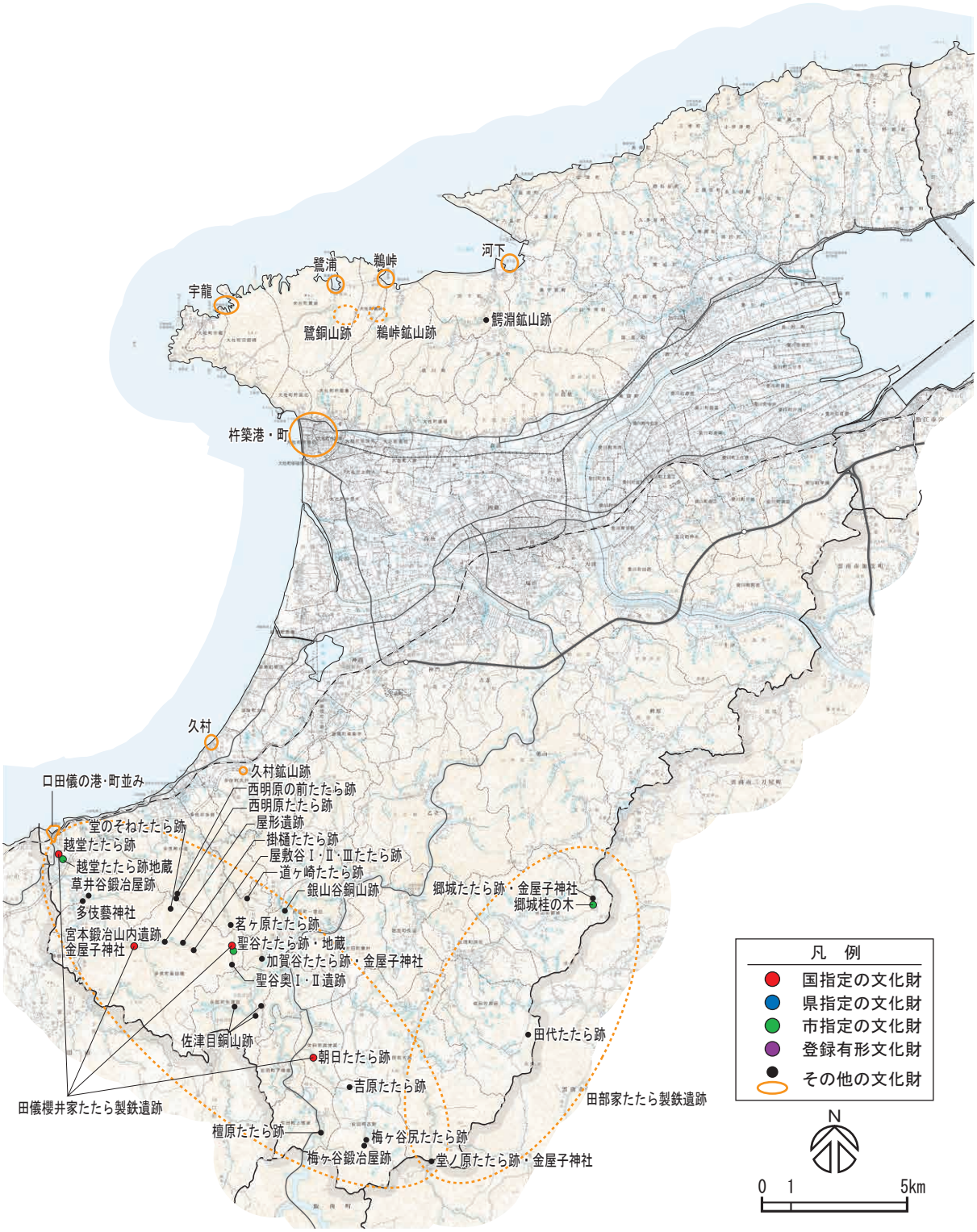

図 20　「たたらや鉱山とともに生きた足跡」における主な構成要素

⑧うみとかわの恵み　～水辺の生業～

【関連文化財群のストーリーと特色】

日本海や斐伊川、神戸川、宍道湖、神西湖などは、交易・交流のみちとしての役割とともに自然の恵みをもたらし、生業としてくらしを支えてきた基盤でもあります。

日本海においては漁業が盛んに行われ、島根半島の“浦”と呼ばれる入り江では漁港と集落が形成され、北前船（きたまえぶね）の影響も受けながら、独自の生活文化・食文化が形づくられてきました。また、十六島（うっぷるい）のりは『出雲国風土記』にも取上げられているほか、松江藩主に献上されたものが将軍家へ贈答されたという歴史のある特産品です。

宍道湖では、宍道湖七珍（シジミ、スズキ、モロゲエビ、ウナギ、アマサギ、シラウオ、コイ）などの魚介類が、多様な漁法により捕られています。

かつての神門水海の名残である神西湖は、周囲約５km、水深が 1.5 mの小さな汽水湖であり、ボラ、マハゼ、ウナギ、エビ、フナなどが捕られます。

宍道湖、神西湖ともに中心となる漁はシジミ漁です。宍道湖では船の上からシジミを捕る手掻（てか）ぎ操業が行われていますが、神西湖では資源保護の観点から、湖の中に入り後ろ向きで歩きながらシジミを捕る漁法が行われています。神西湖での単位面積あたりの漁獲量は約 220 ｔ /㎢と非常に高く、宍道湖の倍以上にもなります。

神戸川では落ちアユの時期になると、中流域で大型の四角い網でアユをすくい取る四つ手網漁が行われます。落ちアユを四つ手網で捕る漁は神戸川固有の伝統漁法であり、全国的に誇れる文化遺産です。一方、下流域では、ウナギ、モクズガニ、汽水域ではシジミ漁も行われています。なお、神戸川で使用された漁労関連の道具は民俗資料として今に伝えられています。

神戸川や神西湖の漁は太古の昔から行われていました。上長浜貝塚ではシジミの貝殻や魚の骨が多数見つかっているほか、海水を利用した塩づくりで使われた製塩土器が出土しています。こうしたことから、この地の水辺の生業は、原始古代まで遡る歴史を有することが裏付けられています。

「うみとかわの恵み」は、日本海、宍道湖・神西湖、斐伊川・神戸川など“水辺”の産物にちなんだ関連文化財群であり、原始古代から現在に至るまで豊かな“水辺の恵み”を受けてきた歴史文化をうかがい知ることができます。

【保存・活用の課題】

・食文化や特産品、伝統漁など、歴史や伝統的な特色の周知
・海と川の幸の歴史や食文化の体験
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・伝統的な特産品や漁法など、歴史的な説明を盛り込んだ情報発信
・伝統的な海と川の幸を使った料理の再現と体験機会の提供
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★猪目洞窟遺跡出土品（アワビなど）
★鰐淵寺文書（十六島のりの礼状）
☆上長浜貝塚、御領田遺跡
☆伝統的な特産品（十六島のりほか）
☆漁労関連の民俗資料　　など

■無形

☆伝統的な漁
シジミ漁、四つ手網・アユ漁、
十六島のり（摘み取り）　　など

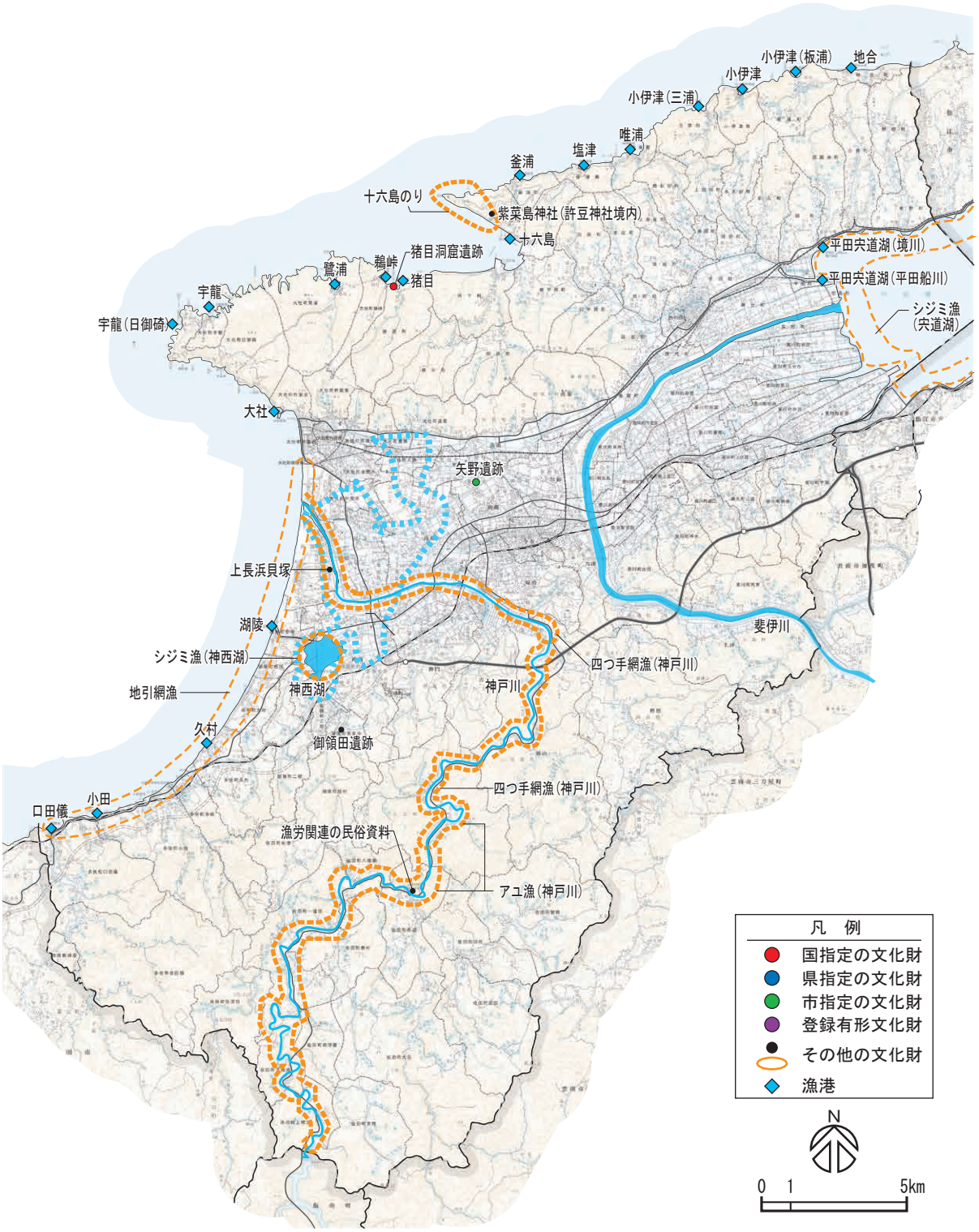

図 21 「うみとかわの恵み」における主な構成要素

⑨地域に息づく民俗芸能や習俗　～神々のふるさとのくらしの文化～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲市には、重要無形民俗文化財の大土地神楽をはじめ、埼田神社青獅子舞や須佐神社の念仏踊りなど７件の県指定の無形民俗文化財、荒茅盆踊りや野尻大歳神社獅子舞など 26 件の市指定の無形民俗文化財があり、指定されたものは全体で 34 件となります。

これに未指定の無形民俗文化財を含めると、各地区の大半で民俗芸能などが継承され、把握しているものだけで 535 団体、祭り等の数は 663 件に及んでいます（平成 23 ～ 25 年度に出雲市が行った「出雲市内無形民俗文化財悉皆調査」による）。

民俗芸能等の種類としては、とんど、神楽、獅子舞、盆踊りなど多岐にわたっています。

とんどは、１月の中旬、小正月頃に今でも多くの地区で行われています。出雲地方では「とんどさん」とも呼ばれ、竹を組み、正月に使った門松やしめ縄、古い御札、書き初めなどを置いて火をつけ、最後に餅を焼きます。また、とんどの煙をかぶると風邪をひかないという言い伝えも残っています。

出雲神楽の多くの神楽団体が神話にちなんだ伝統の舞を今に守り継いでおり、全体構成は、前段に素面のまま採物を持って舞う「七座」、それに続いて祝福を意図する儀式的な舞「式三番」、後段に着面による演劇舞「神能」があることが基本的な特徴とされています。

獅子舞は、神社の神事として行われ、埼田神社、宇賀神社、三谷神社などで行われ、それぞれに独特の形態があります。

盆踊りは、各地で祈願のために行われた念仏踊りが起源であるといわれ、それぞれの土地にちなんだ歌詞や踊りが継承されています。

「地域に息づく民俗芸能や習俗」は、これら無形民俗文化財を中心とした関連文化財群であり、神々のふるさとに息づく神楽や舞などの伝統的な行事・習俗などを見て、知って、学ぶことができ、観光や交流の資源としても生かされています。

【保存・活用の課題】

・民俗芸能を広く発表する場の提供と奉納公演等の周知
・民俗芸能保存団体の活動支援及び衣装・道具等整備
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・民俗芸能の練習成果を披露する発表会等の機会提供と情報発信
・民俗芸能保存団体の活動及び衣装・道具等整備などの育成支援
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★大社町の吉兆幡
★神楽面、獅子頭、衣装、楽器、能本　など
☆神楽や獅子舞などの舞台（神社など）

■無形

★大土地神楽　★大社町の吉兆神事
★埼田神社青獅子舞　★平田一式飾
★須佐神社の念仏踊り　★河下盆踊り　など

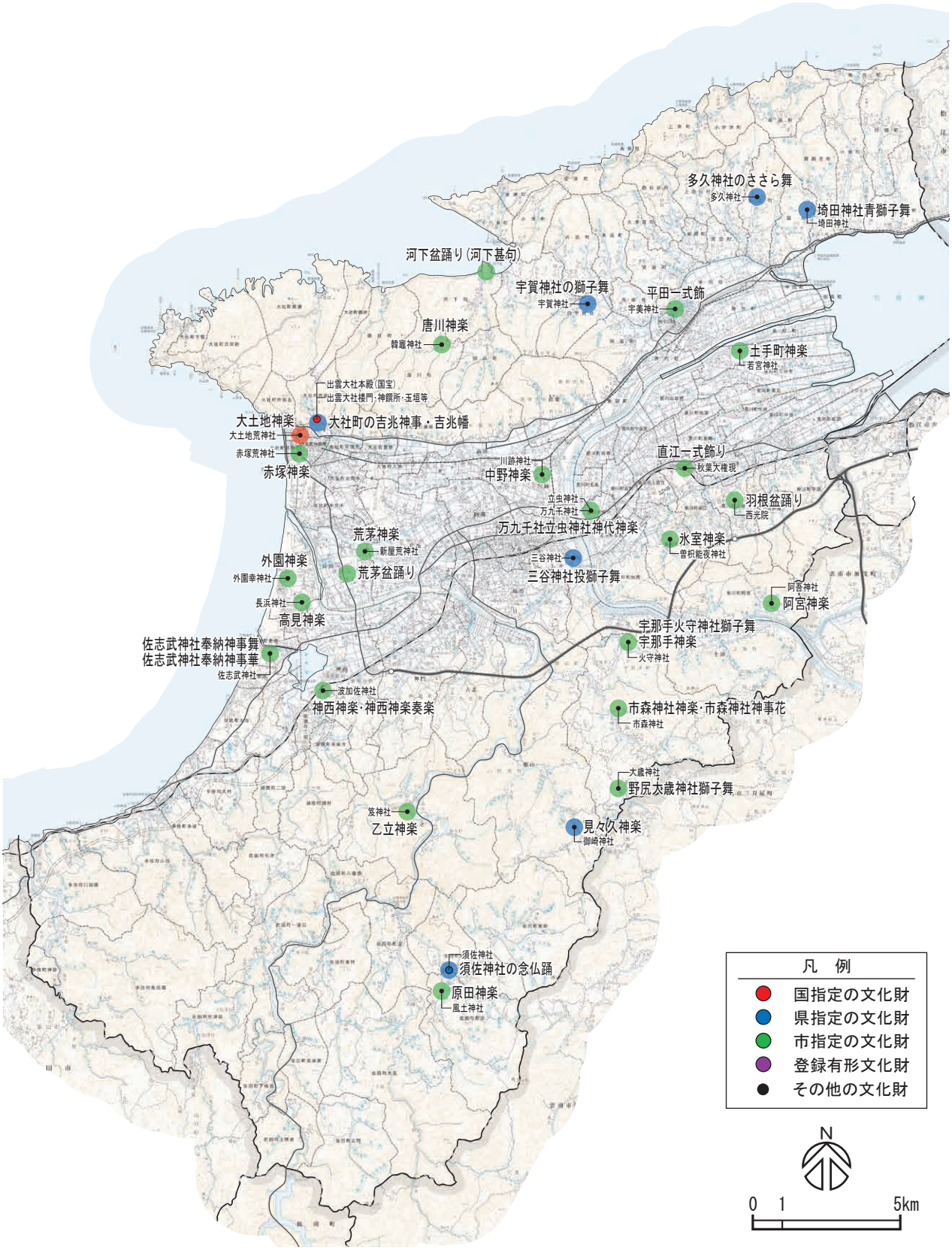

図 22　「地域に息づく民俗芸能や習俗」における主な構成要素

⑩出雲の文芸と学問　～出雲大社の社家や旧家、私塾跡などからたどる文化～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲では、江戸時代、民間を中心に文芸や学問を学ぶ気運が高まり、多方面で人材を輩出しています。

出雲は和歌発祥の地として知られています。戦国期には千家、北島両国造家ではおのおので歌会が開かれていたようで、この潮流が江戸時代の和歌発展につながり、出雲歌壇は花開きます。米子の竹内時安斎岑延によって編まれ、元禄 15 年（1702）に出雲大社に奉納された歌集『清地草』には、出雲をはじめ全国の歌人の歌が掲載されています。また、江戸の僧であり歌人である明珠庵釣月（1659-1729）は、宝永年間（1704-11）に出雲へ下向し、江戸中期のこの地で、二条流和歌を広めました。江戸後期に入ると、本居宣長（1730-1801）に学んだ出雲国造家の千家俊信（1764-1831）が出雲に宣長の国学をもたらしました。俊信は幕末の出雲（大社）歌壇に鈴野屋流を導入して和歌盛隆の基礎を築き、私塾「梅廼舎」では多くの門人を育てました。その後、明治の初めころまでは、千家尊孫（1796-1873）や富永芳久（1813-1880）の活躍により出雲歌壇は全国的にも注目される存在となっていきます。

江戸中期には、俳人・中島魚坊（1725-93）が出雲坂田村（現・出雲市斐川町）の豪農・勝部本右衛門を頼り出雲に移ったことなどが素地になり、出雲では幕末に俳句も庶民の間で盛んになり、明治から昭和にかけて活躍した俳人・原石鼎（1886-1951）を輩出しています。また、詩人・歌人・随筆家である大町桂月（1869-1925）が、わずかな期間ですが中学校教師として赴任しています。

このほか、国南画の大成者である池大雅（1723-76）や画僧の風外（1779-84）が来雲し勝部家との親交を深め佳作を残したことは、当地の文化人の審美眼の高揚に尽くすこととなりました。こうした出雲における文芸と学問の発展については、出雲大社の社家や旧家が大きな役割を担ったことは、手錢家に残された美術工芸品や文書など（手錢記念館に収蔵・展示）からもうかがい知ることができます。

このほか、出雲の学問の発展に貢献した人として、鳴滝塾でシーボルトから西洋医学を学んだ西山砂保（1781-1839）、上塩冶村に有隣塾を開いた伊藤宜堂（1791-1874）、英語学校の包蒙館を開いた勝部其楽（1846-1933）らが挙げられます。

明治５年（1872）に「学制」が発布されると平田の石橋孫八宅に郷校が開設され、翌明治６年（1873）には旧郡屋（郡役人が執務した郡の役所）に平田一番小学が開校します。これが県内で最初の小学校の開校になります。また、雨森精翁が明治 11 年（1878）に平田町に開いた漢学塾亦楽舎は、中学校として地方の教育を補いました。県立出雲高等学校には全国的にも珍しい平田植物園（久徴園）がありますが、これは植物学者・平田駒太郎が教材として植栽したのがはじまりで、大正８年（1919）に命名されました。平田駒太郎は立久恵峡を愛した学者でもあり、ここには遺骨塔がつくられています。

「出雲の文芸と学問」は、近世・近代における出雲の文芸や学問に係る関連文化財群であり、文芸や学問から出雲市や地域の歴史文化の特色などを学ぶことができます。

【保存・活用の課題】

・出雲の文芸と学問に関する関係資料の把握と情報発信

・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・関係資料調査及び関連文化財群の情報発信

・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★石橋家住宅

★いなさ会館（旧島根県立第三中学校講堂）

★佐田町八幡原「岩﨑家文書」

☆梅廼舎跡（都稲荷社前）

☆包蒙館跡

☆有隣塾跡

☆手錢記念館・手錢家文書

☆西山砂保の墓

☆平田植物園（久徴園：大町桂月の碑…）

☆秦家文書（塩冶神社文書）

☆その他和歌関連文書（多伎藝神社文書ほか）　など

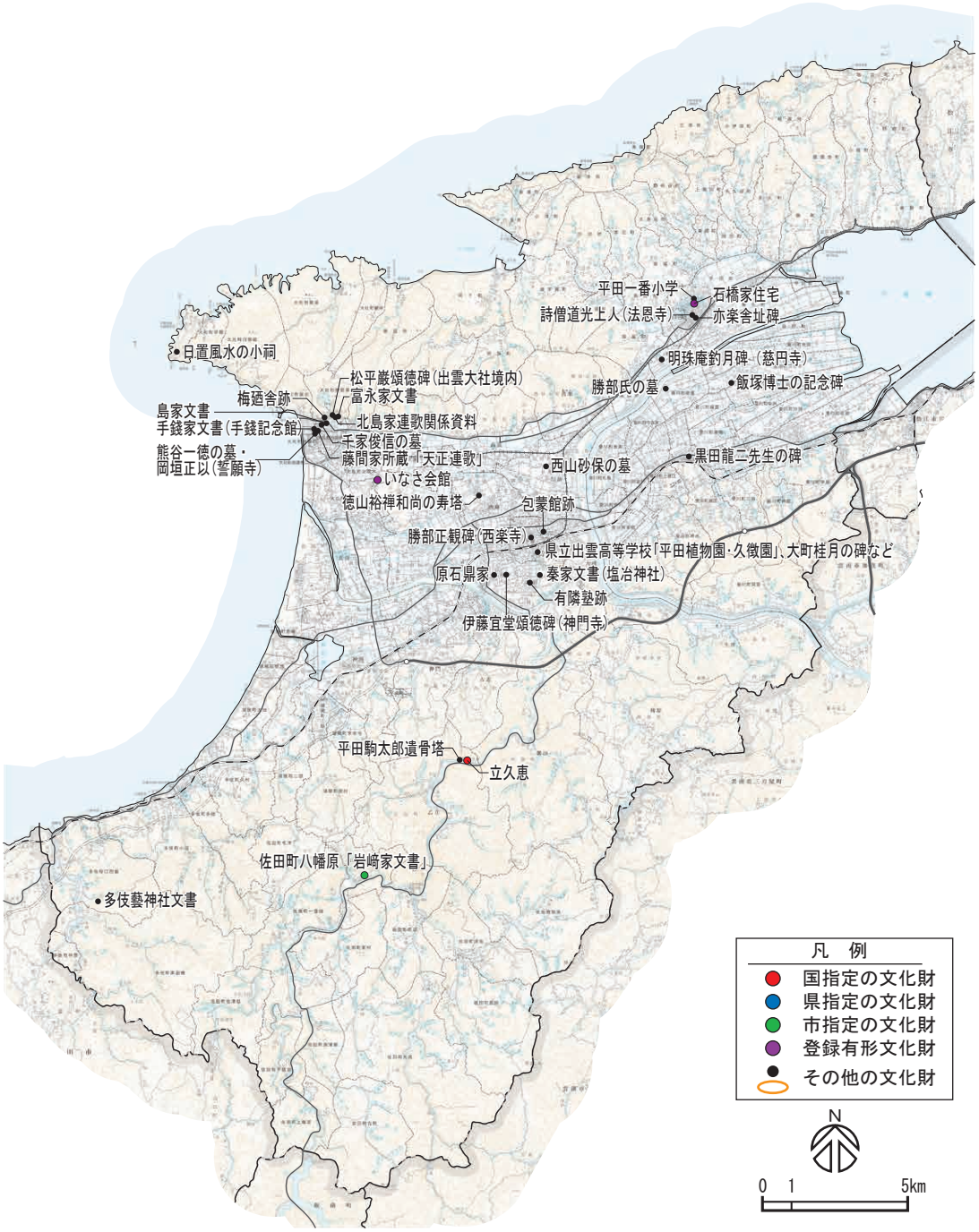

図 23　「出雲の文芸と学問」における主な構成要素

⑪海・川・陸のみちと町場の形成　～多様な交通手段を生かした交流・交易とくらし～

【関連文化財群のストーリーと特色】

出雲市は、海、川、湖、平地、山地、半島など多様な地形条件を備えており、こうした条件を利用し、一方で克服しながら、水運（海、川・湖沼）や街道を通じて、交易・交流を行い、集散地などの町場を形成してきました。

水運についてみると、西日本海地域においては、平安末、鎌倉期以来の津や市が発展し、内陸交通とも結びついて、室町末、戦国期には多数の港湾都市を成立させることになりました。当時の史料から、出雲国では平田、杵築、安来、白潟（しらかた）などが確認されています。また、近世初頭の商人・平田屋惣右衛門（ひらたやそうえもん）は、毛利輝元に請われ、16 世紀末の広島城築城と城下町建設に携わりました。港湾都市・平田で培った技術を、広島の町割、運河の開削などに生かし、その名は町名（平田屋町）や運河の名称（平田屋川）となりました。

さらに、海上交通（海のみち）は、江戸時代の 18 世紀末に蝦夷地（えぞち）と大坂を日本海経由で結び、各寄港地で産品の買い付けを行う北前船が登場すると、この地では宇龍や鷺浦が風待ちの寄港地として栄えました。また、口田儀は近世において鉄の集散地、積出港として発展しました。

宍道湖を含めた舟運（川のみち）は、斐伊川や神戸川、高瀬川、平田船川、堀川などで行われました。

陸上交通である街道･往還（陸のみち）は、主なものとして山陰道や斐伊川、神戸川沿いの中国山地･山陽方面への街道、出雲大社・鰐淵寺・一畑寺への参詣道などがあります。このうち古代山陰道は、律令国家の成立後に本格的に建設された七道（行政区、幹線道）の一つであり、ルートの変更を伴いながら近世山陰道へと移行しました。そして近世山陰道は東西方向の基幹街道としての役割を担い、現在の国道９号へと継承されました。

これらのみちと産業などが関連して、前記の港、木綿の集散地や木綿市、出雲大社とその周辺などに、町場や集落（集住）が形成され、今に引き継がれています。特に、平田の「木綿街道」、出雲大社の門前町、鷺浦・小伊津をはじめとする島根半島の浦、口田儀では歴史的な風情を感じる町並みが残されています。

「海・川・陸のみちと町場の形成」は、北前船をはじめとした海上交通、斐伊川や神戸川、平田船川などにおける舟運、そして街道を通じた交易・交流と形成された町場にちなんだ関連文化財群であり、物流の大動脈であった北前船をはじめとした海のみちや舟運、街道の面影、そして交易・交流を背景とした町場の歴史文化を追体験できます。

【保存・活用の課題】

・海運、舟運、街道の歴史的背景や町場の形成の周知
・市民、観光客等の見学及び歴史学習への利用

【保存・活用の方針】

・関連文化財群の情報発信
・市民、観光客等の見学ルートづくりとＰＲ、利用促進

【主な構成要素】

■有形

★出西・伊波野一里塚
★石橋家住宅
★藤間家住宅
☆藤間家文書
☆「木綿街道」（町並み：港湾都市として発展）
☆島根半島の港・集落（町場）：宇龍、鷺浦、十六島、小伊津
☆口田儀の港・集落（町場）
☆平田船川、高瀬川などの河川
☆旧山陰道・旧備後街道などの街道・往還
☆斐川の高瀬川　　など

■無形

☆木綿市（杵築、今市、平田、直江）　　など

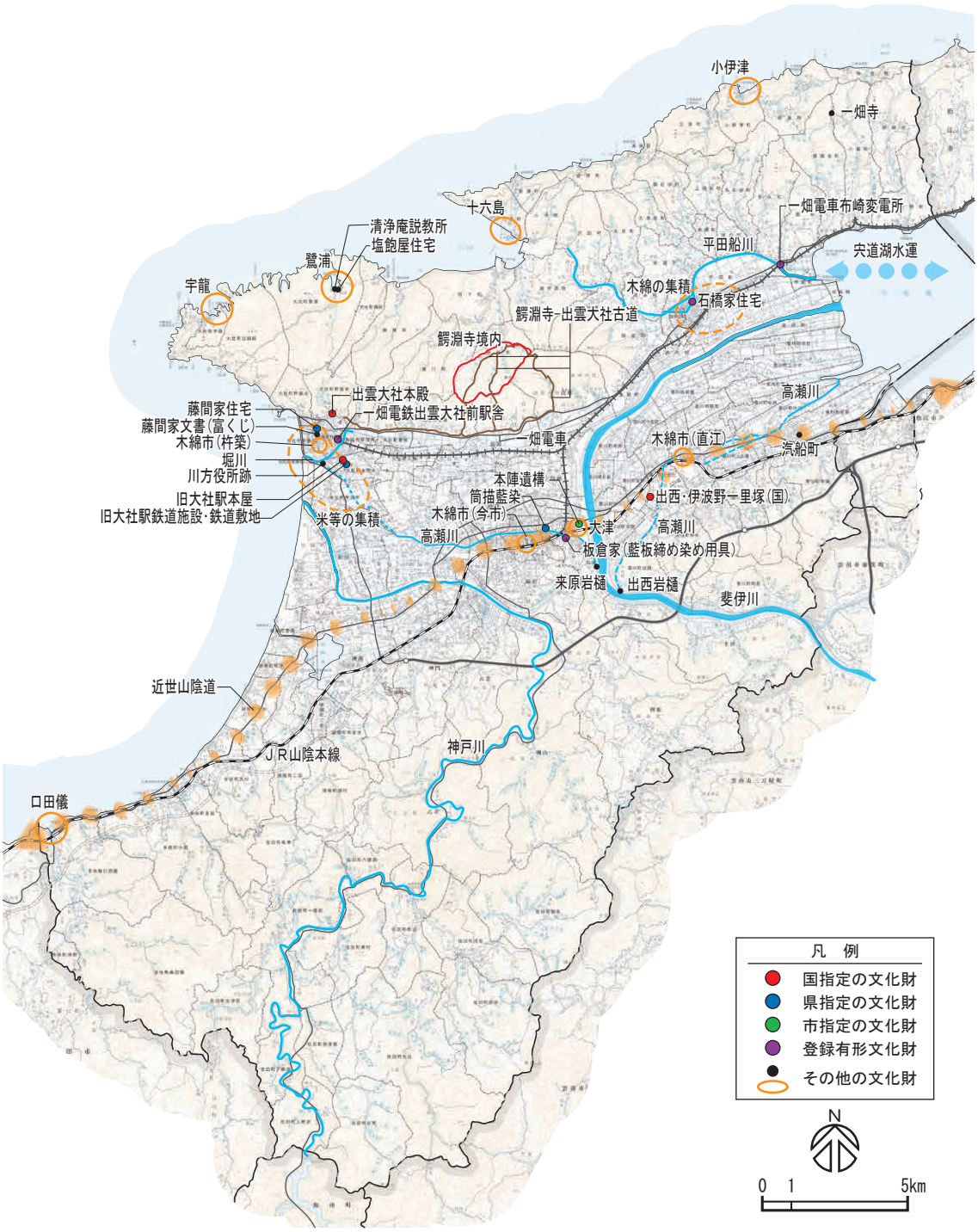

図 24　「海・川・陸のみちと町場の形成」における主な構成要素

４．歴史文化保存活用区域に関する事項

歴史文化保存活用区域とは、「不動産である文化財や有形の文化財だけではなく、無形の文化財も含めて文化財が特定地域に集中している場合に、文化財と一体となって価値を形成する周辺環境も含め、当該文化財（群）を核として文化的な空間を創出するための計画区域として定めることが望ましい区域」（「歴史文化基本構想」策定ハンドブック：文化庁文化財部）とされています。

基本的方針で示した、「周辺環境を含めて、文化財を守り、生かし、文化の薫り高い地域をつくる」ことを実現するため、文化財と市街地、集落地、田園、海辺・水辺などが一体となって構成される９つの歴史文化保存活用区域を設定します。市民参加や協働の取組などを通じて、文化的な空間の保全・創出、文化の薫り高い地域を守り、育てていきます。

歴史文化保存活用区域の保存・活用の課題及び方針について、区域ごとに抽出、設定し、第５章の文化財の保存・活用に関する措置に掲げる取組を進めていきます。

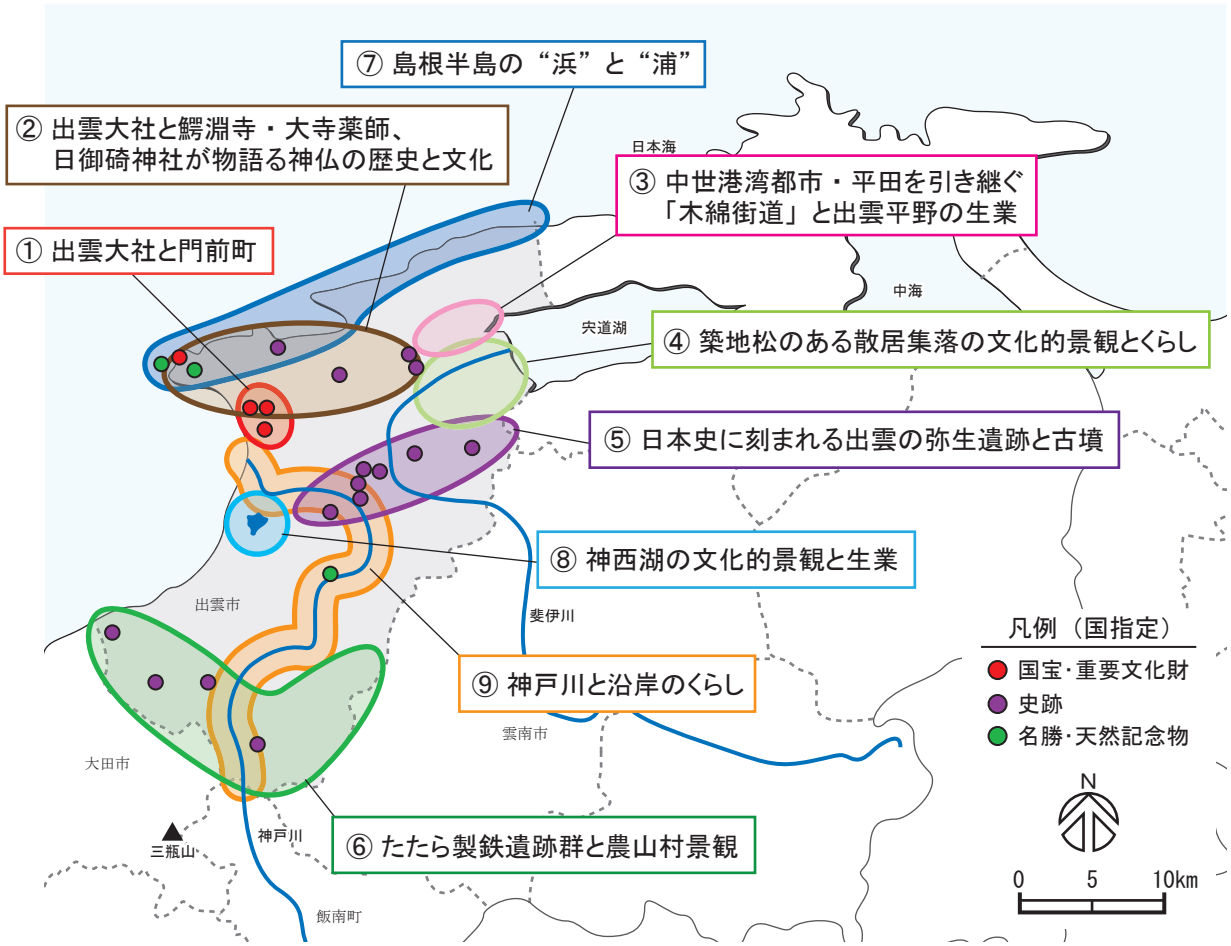

図 25　歴史文化保存活用区域の概略